

テーマ：響きを聴くことから始める3歳児向けピアノ導入① 「雨の音あそび～クラウス・ルンツェメソッドより～」

発表：高地誠子（小田原短期大学保育学科講師）

要旨

昨今の早期教育の影響か、勤務先の音楽教室でも3歳からのピアノレッスン希望者が増えている。2016年、2017年に4歳児（年中児）を対象としたクラウス・ルンツェのメソッドと実践例について本大会で発表した。今回はその前段階である3歳児（年少児）向けのピアノ導入について初回から6回目までのレッスンの実践例を基に発表する。

3歳児にとってピアノを弾くことは自己表現の一つであり、身体機能や認知面、聴覚の未熟なこの時期に読譜や演奏技術の獲得を主体とした指導は時期尚早であると考え。ピアノに親しむことに重点をおきながら、将来の豊かなピアノ演奏表現に繋がる3つの要素「①良い耳：耳をよく傾けて音の響きや音色の違いを聴こうとする姿勢、②演奏の基本技術：様々なタッチによる音色の違いを体験して楽器の特性を知る。腕や手を柔軟に保ち無駄な力を入れないように打鍵する。③音のイメージ：音を出す時には常にイメージした音色を演奏しようとする姿勢」を身に付ける事をねらいとして導入レッスンを行っている。

また、幼児期の教育について「幼児の教育は遊びを通して指導する」と幼稚園教育要領にも示されていることから、学習内容はピアノを使った音楽遊びの中で行うことが望ましいと考える。

今回の発表ではこれらの3つの要素を身に付けることをねらいとして、クラウス・ルンツェのメソッドの中から倍音の響きを聴く課題「まほうつかい」の項目を3歳児向けに「雨の音あそび」に改良した実践例を報告する。回数を重ねるにつれて子どもの聴く様子に変化が見られ、ピアノの音の特徴である、減衰していく音にじっと耳を傾ける様子が見られた。

楽譜に書かれた音符を弾くようになる前にピアノという楽器をまるごと表現媒体として捉え、その表現の多様性に気づき、音色の響きを体験する事が将来の豊かな演奏表現に繋がるのではないかと考えている。

以上